

# 越境する若者と複数の「居場所」

—異文化間教育学と居場所研究の交錯—

額賀美紗子

key words

.....  
越境  
若者  
居場所  
ホーム  
トランスナショナルリズム  
.....

## 1 越境する子ども・若者にとっての「居場所」とは

不登校や引きこもり、いじめ、フリーターの増加といった教育問題が注目を集める中で、子ども・若者の「居場所」づくりに関する議論が活性化している。近年の研究の中で「居場所」は、自己肯定感や安心感を得ることができ、「他者との関わりの中で自分の位置と将来の方向性を確認できる場」(田中, 2001: 8) という意味で用いられるようになってきた。住田・南(2003: 4)は、子どもは「自己を承認し、再認識させてくれるような他者との関係」によって「自己受容観や自己肯定感、安定感や安心感を実感する」ことができ、こうした客観的条件と主観的条件の組み合わせが「居場所」を構成すると論じる。さらに、子ども・若者の「居場所」は大人が設定するのではなく、子どもが主体となってさまざまな人間関係を築く場であるという指摘もされている(新谷, 2001)。

ではこうした居場所研究と異文化間教育学研究の接点はどこに見いだすことができるだろうか。異文化間教育学において研究対象となってきたマイノリティ集団の居場所を、われわれはどのように考察し、構想していけばいいのだろうか。

マイノリティの居場所づくりを提起する矢野(2007)は、自身の専門分野である社会教育学においては「日本人の若者にとっての居場所づくり」が自明とされ、「マイノリティにとっての居場所」という視点が抜け落ちていることを批判的に考察している。そして、「マイノリティにはマイノリティが主役として安心して自身の存在確認をしながら成長できる居場所」(p. 23)

が必要であることを訴える。

まず確認しておきたいことは、異文化間教育学における多くの研究が「居場所」という言葉をあえて使わずとも、マイノリティの子どもたちが受け入れ国に適応していく過程を分析する際に子どもたちの自己肯定感や自己受容感のありかたに注目してきたという点である。すなわち、マイノリティの文化や自尊心が尊重され、その過程でかれらが安定感や安心感を実感できる居場所をどのようにしてつくっていくかという問題は、異文化間教育学の中心的なテーマの一つとされてきた経緯がある。

「居場所」という概念を、国や文化を越境し、社会の周縁部に位置づけられがちな子どもたちの視点から改めて検討すると、その居場所づくりの特殊性が浮かび上がってくるだろう。かれらはマジョリティとは異なる意味をもつ居場所をつくっているし、固有の問題を解決するための居場所が必要にもなる。例えば、真鍋(2007: 34)はニューカマーの子どもは不安定な法的身分のために日本をいつ立ち去ることになるかわからない状況にあることを指摘し、「まず子どもがそこで自分が生きるための営みを繰り返すことが可能か、すなわち、日本に『居られる』のかどうか、から問う必要がある」と述べる。国と文化の境界を越える子どもたちにとって、自らの文化やアイデンティティが尊重される「居場所」はそこに当然のようにあるものではなく、制度との関係、他者との関係の中で新たに創り出していかななくてはならないものである。

本特集では、国や文化を越境する子ども・若者にとっての居場所はどのような空間かという問いを中心に、異文化間教育学と居場所研究の交錯について具体的な事例を参照しながら検討してみたい。そうすることによって、越境する若者たちの居場所が複数存在すること、またそうした居場所づくりはときとして国境を越えて行われていることが明らかになるだろう。本論文では居場所に関してどのような知見が提出されてきたのか、国内外の研究状況を概観する。

## 2 マイノリティ生徒の居場所に関する欧米の研究動向

### 2.1 一国内における複数の居場所

移民をどのようにホスト社会に統合していくかという問題に長く取り組ん

できたアメリカ社会では、マイノリティの子どもたちの帰属集団や帰属意識、自己肯定感に関する研究が多く蓄積されている。これらの研究は、黒人や移民の子どもたちが白人主流社会の価値規範とは異なる文化空間に生活し、そのような場に愛着や帰属感を抱いていることを明らかにしてきた。子どもたちは標準英語を獲得し、アメリカの学校で教えられる価値観を身につけると同時に、自分の人種・エスニックルーツが尊重される居場所を模索していることが示唆されている。

具体的にはどのような場がマイノリティの子どもの居場所として注目されてきたのだろうか。アメリカの高校生活を移民生徒、アメリカ人生徒、教師それぞれの視点からエスノグラフィックに描いたオルセン (Olsen, 1997) は、英語を母語としない生徒のための特別教室である ESL (English as a Second Language) が高校内で唯一、移民生徒たちの文化を包摂する空間になっていることを指摘する。学校が多文化主義を称揚する一方で、大半の教師は英語が理解できない移民生徒を「厄介者」扱いしているし、アメリカ人生徒たちは人種ごとに階層化されている生徒文化を形成する中で移民生徒を最も周縁部に位置づけ、「見えない」存在にしている。そうした環境の中で ESL 教室だけは生徒たちがたどたどしい英語を嘲笑されることもなく、移民生徒同士がアメリカで経験する悩みや不安を共有し、互いに支え合う場所になっていた。オルセンは、移民生徒を排斥する学校文化の中で生徒たちのルーツや言語に対する理解があるのは通常学級とは別に設定されている ESL 教室だけであることを、批判的に考察する。

興味深いのは、移民生徒たちが ESL 教室を最初の居場所としながらも、やがてはそこを足場にしてアメリカ人生徒が形成する主流文化の中に参入し、新しい居場所を ESL 教室の外にも見つけていくという指摘である。このように移民の子どもたちの居場所は受け入れ社会への適応過程の中で変化していく。エスニック文化が尊重される ESL 教室のような場は移民生徒たちの安心感や自尊心を高めると同時にアメリカの主流文化に関する知識を生徒たちに授け、それによってかれらは主流社会に参入するインセンティブやスキルを獲得して新たな居場所探しに乗り出すことができるのである。

さらに数々の先行研究は、学校の外に広がるエスニックコミュニティも移民生徒の受け入れ社会への適応に重要な意味をもつ居場所になっていること

を指摘している。ジョウとバンクストン III (Zhou & Bankston III, 1998) は、ベトナム系アメリカ人生徒の学業的成功の要因がエスニックコミュニティの文化と構造に見いだされることを考察した。ベトナム系コミュニティは決して裕福な世帯から構成されるわけではない。しかし、構成員同士の緊密なネットワークによって情報の交換と共有が活発に行われており、子どもに高い学力を求める教育的価値や道徳的規範が浸透している。このことが移民家族の適応を促進させ、子どもの学習意欲を高めているというのである。

母語や母文化が維持され、同じ出身国の者同士が気軽に集って経験や心情を共有できるエスニックコミュニティは、受け入れ社会の同化圧力を和らげる機能をもつ。移民にとっての緩衝地帯であると同時に、受け入れ社会との橋渡しの役割を担っているともいえるだろう。とりわけコミュニティ内のさまざまな施設—教育機関や教会など—は情報や知識をはじめとする重要な資源を移民家族に提供している。こうした点で、エスニックコミュニティは移民の子どもたちが受け入れ社会に適応していくにあたって必要不可欠な居場所になっている。

しかしその一方で子どもたちが経験する葛藤も見逃せない。子どもたちが成長し、受け入れ社会の価値規範を身につけるに従い、かれらはエスニックコミュニティという居場所が自明とする価値規範に対して反発や抵抗も覚えるようになっていく。主流社会における居場所と、エスニックコミュニティにおける居場所、その二つを同時に得ようとするとき、移民の子どもたちは両者の文化や制度の齟齬を調整するという困難に直面する。その過程の中で、どちらか一方だけを居場所にするような選択を迫られることもある。

こうしたとき、受け入れ社会とエスニックコミュニティをつなぐ「仲介役 (liaison)」の存在が重要になってくる。アメリカでは困難を抱える子どもたち (at-risk children) のための支援組織が国とコミュニティレベルで多数創設されているが、そうした場ではバイリンガルの能力をもつ仲介役の大人たちが中心になって放課後や週末にさまざまな活動を組織し、そのなかで学習支援や精神的サポート、家族と学校との連絡を行っている。主流文化とエスニック文化の溝を埋めるこのような試みは、学校ともエスニックコミュニティとも異なる新たな居場所づくりの機会を子どもたちに提供する。

だが、移民の子どもたちが、こうした主流社会の支援組織によって創り出

される居場所にさほど参加していないことも明らかにされている。スアレス・オロズコら (Suárez-Orozco et al., 2008) の調査によれば、移民の子どもたちの多くは放課後や週末をエスニックコミュニティの中で両親や兄弟、祖母や叔父叔母と一緒に過ごすという。かれらの調査によると、放課後の学習支援の場に通う子どもたちは調査対象となった308名の外国生まれの子どものうちたった9%だった。このことは、マジョリティ側に立つ大人たちがどのようにして主流社会とエスニックコミュニティとの間の橋渡しを行い、マイノリティの子どもたちが主体的に参加したいと思う居場所を提供していけばよいのかという問題を提起している。

## 2.2 国を超えて存在する複数の居場所—「ホーム (home)」という概念—

以上述べてきたように、マイノリティの子どもたちは出身国に根ざすエスニック文化と受け入れ社会の間を日々往来して複数の居場所をもつことが示唆されてきた。こうした居場所の複数性はトランスナショナルな視点の導入によって、近年一層注目を集めている。トランスナショナリズムとは、グローバル化の展開に伴って人々が二つ以上の国民国家と政治的、経済的、社会的、情緒的關係性を継続的かつ日常的にもつ現象を指す (Basch et al., 1994)。この視点を重視する研究には「ホーム」という概念がしばしば登場する。ホーム (家/故郷) とは人々が帰属意識や愛着、安心感を抱く場所であり、トランスナショナルな文脈における居場所概念と捉えることができるだろう。

そうしたトランスナショナル研究が提起するのは、ホームの複数性である。移民二世を研究するレヴィットとウォーターズ (Levitt & Waters, 2002) は、その編著書『移りゆくホームの顔 (The Changing Face of Home)』の中で、移民の子どもたちが出身国とホスト国の両方の影響を受けながら、その両地点に複数のホームを創り出すことを強調する。レヴィット (Levitt, 2009: 1238) は次のように述べる。

移民二世の若者たちは、さまざまな点で異なり、しばしば対立し合う世代的、イデオロギー的、道徳的な準拠点 (reference points) の狭間に位置づけられている。その準拠点とは両親のものであったり、祖父母のもので

あったり、または複数存在する祖国 (homeland) についてのかれら自身の経験上、想像上の認識を含む。かれらの社会的移動についての展望や、価値規範と集団関係に関するスタンスは、かれらが住むトランスナショナルな社会空間のすべての場におけるイメージや障害や可能性によってかたちづくられている。

こうした仮説は、移民二世の子どもたちを受け入れ国と母国をまたぐトランスナショナルな社会空間に生活する存在として捉えた数々の研究から立ち上がってきたものである。例えば、フィリピン系移民二世の若者にインタビューをしたウォルフ (Wolf, 2002) は、若者たちが「ホーム」という言葉を使う際には、アメリカのことではなくフィリピンに言及していることを指摘する。若者たちは「彼方の故郷 (Home)」に愛着を抱いており、その地を準拠点にしてフィリピンやアメリカ社会に関するさまざまなイメージを作り上げていく。物理的な移動を伴わずとも、若者たちはフィリピンと情緒的に結びついており、この点において祖国はかれらにとって重要な居場所になっているのである。若者たちがフィリピンやアメリカに抱くイメージは、「今ここ (アメリカ) にある家 (home)」で一緒に住む祖父母や両親が抱くフィリピンやアメリカのイメージとはまた異なるものである。海の向こうの想像上の Home と、今ここの home の狭間に生活する二世の若者たちは、「フィリピン系アメリカ人」として生きることの意味について、多様で矛盾するメッセージを両地点のホームから受け取っていることが示唆されている。

またキブリア (Kibria, 2002) は、中国系・韓国系の若者たちのホーム概念が母国訪問の旅の中で変化していったことを考察している。かれらは、自らの外見や英語のアクセントゆえにアメリカ社会で差別や排斥を経験するが、そうした主流文化への対抗措置として、血のつながりがある彼方の母国を居場所として想像する。しかし実際母国に訪問をしてみると、かれらは言語力や知識の欠如によって「中国人」「韓国人」ではなく、「アメリカ人」として周囲の人々に扱われることになる。この衝撃的な経験を通じて、若者たちはアメリカを自らのホームとして再認識するようになる。その一方でかれらは中国・韓国の経済発展に目を留め、キャリアのために母国と関係を維持し続けることの必要性を語るようになる。キブリアの研究は、個人の戦略的な見地

から母国社会と受け入れ社会の両方をホームとする試みが生まれることを示している。

ここで留意しておきたいのは、ホームが国境を越えて複数存在するという現象は歴史的に目新しいものなのかという問題である。トランスナショナルな視点の重要性を認識する研究者たちは、その現象は決して今に始まったものではないが、グローバル経済の拡大と情報科学技術の発展によって、移民はかつてないほど強い結びつきを受け入れ国と出身国の両方と維持し続ける手段と動機づけを得ていると主張する (Portes et al., 1999)。特にインターネットをはじめとする各種メディアの急速な発展は、彼方の祖国に生活する人々とのコミュニケーションを容易にし、国境を越えた情緒的な絆の形成を可能にしている。たとえアメリカで生まれてから一度も母国を訪れたことがなくとも、テレビやインターネットを通じて母国に関する情報を入手し、子どもたちは母国への憧れや愛着を抱くようになってきている。複数のホームの形成に際し、物理的な移動は必ずしも必要としないのである。

この点で子どもたちが作り上げるのは「想像上のホーム (imaginary home)」であり、それは母国の実態とかけはなれているかもしれないことが指摘されている (Wolf, 2002)。一方で、母国への訪問や送金、親族との電話やインターネット上でのメールやチャットのやり取りなどを通じて、想像上のホームは子どもたちの「今ここ」の日常生活に確かにに影響を与えている。「今ここ」において経験できるホームと、想像や記憶の中に存在する彼方のホームの両方をどのように子どもたちが日常生活の中で接合しているのか、そのことは子どもたちのアイデンティティや進路形成にどのように影響しているのかを追究していくことが課題とされている。

### 3 異文化間教育学における居場所研究

では異文化間教育学において、その学問領域が対象としてきた子どもたちの居場所はどのように考察されてきたのだろうか。冒頭でも述べたように、マイノリティの子どもたちが自分の文化的背景に誇りを抱ける空間をつくることは、異文化間教育学の重要なテーマの一つとされてきた。多文化教育や地域ネットワーク、マジョリティによるマイノリティ支援のありかたといった枠組みからマイノリティの子どもたちの居場所について検討した研究は多

く蓄積されている。

例えば、中国帰国者三世四世の子どもたちに注目して学校のエスノグラフィを行った高橋(2009)は、日本語教室が子どもたちの「心の居場所」としての機能を果たしていると考えする。通常学級の学習進度についていけずに孤独感を感じている子どもたちにとって日本語教室は学校の中で唯一「心が安らぐ、何でも話せる、甘えられる、誰も自分のことを『できないやつ』とみなさない、そんな場所であった」(p. 116)。それと同時に、日本語教室は学習言語の定着、教科指導、生活指導を担う場所でもあり、日本の学校への適応をさまざまな側面から促進する役割を担っている。しかし一方で日本語教室は学校全体の組織や制度において周縁化されがちである。高橋は、帰国生徒の背景が多様化するに伴い居場所としての日本語教室の存在意義を絶えず再構築していく必要性を指摘している。

また、学校の外に広がる地域社会にマイノリティの子どもたちの居場所を見いだす調査研究も多い。『異文化間教育』18号では『地域ネットワークと異文化間教育』、28号では『地域におけるニューカマー支援と連携』という特集が組まれたが、いずれも学校、行政、支援団体などが協働してマイノリティ生徒の言語習得や学習支援、ルーツの探索などを支援する居場所づくりのありかたが模索されている<sup>1)</sup>。

マイノリティの居場所づくりの主体は誰か、という問題を考えるにあたっては清水・「すたんどばいみー」(2009)の議論が参考になる。「すたんどばいみー」は神奈川県いちょう団地で展開する外国人を対象とした支援団体である。発起人である研究者の清水とボランティアの家上は、「すたんどばいみー」の活動が日本人の大人の声を反映したものから外国人の子どもたち自身のインフォーマルな声を中心としたものに変化していった過程を描いている(清水・家上, 2009)。その変化は、活動の担い手が日本人の大人から、当事者である外国人の子どもたちへと移り、「すたんどばいみー」が「日本人に対して、現状を改善するよう要請を行うという『当事者運動』を展開」(p. 8)させる場になっていったと分析されている。特筆すべきは、こうした当事者団体が日本の学校と連携し、外国人生徒の問題に対する日本人教師の意識や授業のありかたを変えた点である。清水らは「居場所」という言葉を積極的に使用しているわけではないが、こうした当事者団体の活動は、外国



人の子どもたちが日本国内におけるマイノリティとして自己主張や問題提起をし、他者と協働できる居場所を学校の内外に複数つくる試み、と解釈することができるだろう。

以上述べてきたように、異文化間教育学ではマイノリティの居場所に関する理論的、実践的示唆が多く積み重ねられてきた。しかし、それらの研究に国境を越える視点が欠如しがちであったことも指摘できる。欧米では一国内の研究枠組みを自明とする方法論的ナショナリズムの問題点が指摘されているが(伊豫谷, 2007)、異文化間教育学もまた例外ではない。子どもたちをどのように日本社会に適応させていくか、という理論的視点からは、かれらの母国社会とのつながりや、母国社会における居場所に関する考察は看過されがちである。

『異文化間教育』37号の特集は『ルーツからルートへ』であったが、このテーマの重要性を論じる渋谷(2013: 6)は、ニューカマーの子どもたちが「今ここ」に至るまでにたどってきた「揺らぎやズレを含むルート」に着目する必要性を提起する。本特集にひきつけるならば、ルートに注目するということはトランスナショナルな視点を採用するということであり、そのレンズからは子どもたちが形づくる複数のホーム／居場所が見えてくることだろう。ルーツが帰属集団や帰属意識を示すと考えれば、その概念はホーム／居場所と重なるところもある。ルーツ、ホーム、居場所といった概念を本質主義的、固定的に理解するのではなく、トランスナショナルなルートの中で動的、複数的に見出す視点が異文化間教育学の中に必要とされている。

こうした新しい視点に立つ研究の一つとして、在日コリアンを対象にした戴(2009)の考察が参考になる。「在日コリアン青年連合(KEY)」<sup>2)</sup>で調査を行った著者は、そこで提供される教育プログラムや社会文化活動が「ホームランドとホストランドに焦点を合わせながら広範な歴史社会的研究視点をとっており、ディアスポラ・スタディーズの一つのありかたとして解釈できる」(p. 139)と指摘する。若者たちにとってKEYは「コリアンというルーツ」をめぐる自己理解を模索する場であり、それは日本、朝鮮半島、東北アジアを含めたトランスナショナルな視点から行われているという。例えばKEYは就職・進学・恋愛など人生の局面で「在日」として経験する事柄を本音で議論できる場であるばかりではなく、在日三世や四世、韓国人や中国籍のコ

リアンなど多様な「コリアン」の若者たちが出会う場でもある。歴史・人権講座では在日コリアンや朝鮮半島の歴史、日本と朝鮮の政治問題、人権・平和といった普遍的概念を「学び合う」ことを目的とし、若者たちが「国籍」や「民族」といった既存の概念を相対化する中で自らのルーツを模索し、自己変革していくことを促している。こうした活動を通して、若者たちは日本の外に想像力を広げ、日本、朝鮮半島、東北アジアを在日コリアンの位置からつなげる活動を展開している。参加者のインタビュー中には、KEYが在日コリアンの若者の「居場所」になっているという発言があるが、著者の指摘によれば、そうした居心地のよさは、KEYという場においてかれらの描くホームや模索するルーツに関して「答えは一つじゃない」(p. 176) ことが明示されているからである。

ホームやルーツをトランスナショナルな視点から捉える言動は、海外に住む／海外から帰国した日本人の若者や子どもの間にも見いだせる。額賀(2013)はロサンゼルスに住む日本人の子どもたちが日米の文化や制度をつなぐトランスナショナル・コミュニティに生活し、かれらの日常が両国の言説や権力構造の中に埋め込まれていることを考察する。トランスナショナルな社会空間は母親たちによって整備され、その中で育つ子どもたちは二項対立的に「日本人」と「アメリカ人」を捉えず、「日本人」「アメリカ人」「アジア系」という複数のラベルを同時に身につけた自己を肯定的に語り、柔軟な日本人アイデンティティを主体的に形成する過程にあるという(p. 116)。かれらは日本にもアメリカにも情緒的つながりを持ち、大学進学や就職を考える際に日米両国ばかりか、それ以外の国をも視野に入れる傾向が見いだされる。家庭内の恵まれた経済・文化資本を活用し、かれらの間には国境を越えてさまざまな地点を「ホーム」して活動を展開するコスモポリタン志向<sup>3)</sup>が育っている。

国境を越えて複数のホームやルーツを形成するという現象は、在日コリアンや海外帰国生だけにみられるものではないだろう。戴(2009: 180)は、沖縄人やほかの在日外国人の間でもすでにディアスポラという言葉が用いられ、活動として展開されていると示唆する。こうした現状を理解することを目的に、本特集ではディアスポラやトランスナショナリズムといった国境を越える分析枠組みを用いながら、マイノリティの若者・子どもたちが形成す

る「ホーム」の複数性・多様性について考察した論稿を掲載した。以下ではその内容について簡単に紹介する。

#### 4 本特集の構成

「越境する若者と複数の『居場所』」をテーマとする本特集は4本の寄稿論文と1本の自由投稿論文から構成される。調査対象はニューカマー、留学生、アメリカのアジア系移民、ミックスの子どもたちと多岐にわたっているが、どの論文も越境する若者たちにとっての居場所／ホームが国境を越えて複数存在することを提示している。

三浦論文は、大都市中心部にある地域学習室とエスニック教会でのフィールドワークをもとに、中国、タイ、フィリピン出身のニューカマー1.5世が形成する「ホーム」の感覚を丁寧に考察している。著者は、学齢期途中で来日したニューカマーの若者たちが成長の過程で「ホーム」に対する意味づけを変容させていっていることを指摘し、ライフステージを考慮したトランスナショナルな分析視角の重要性に言及する。著者によれば、調査対象となった若者たちは来日前から日本を「ホーム」とすることへの期待や反発を形成しており、来日以降はエスニック教会や地域学習室を居場所としながら、日本への帰属感を高めていく。こうした日本を「ホーム」とする感覚は、かれらが帰郷した際に感じる違和感によってより強化されるが、そのことは出身地への愛着を喪失することを意味しない。かれらの将来展望は、出身地や日本、その他の国々へと広がっている。著者の考察は、ニューカマーの若者たちが安心感や自己肯定感を得られる「ホーム」が居住する一つの国に限定されず、どこかの「ホーム」に力点を置くかは成長や経験の過程で移りゆくものであること、しかしそれゆえにどの国においても違和感や排斥感を抱かずにはいられないかれらのジレンマも提示している。地域学習室やエスニック教会が重要な居場所として機能することが示されているが、ニューカマーの文化が尊重されるこうした場と、受け入れ社会の制度や文化をどのように架橋していくかということも異文化間教育学が取り組まねばならない課題の一つである。

山ノ内論文は日本とブラジル両国でのフィールドワークをもとに、ブラジルの日系人、在日ブラジル人、日本から帰国したブラジル人の若者たちがそ

それぞれ形成する居場所について分析し、日本とブラジルを架橋するトランスナショナルな居場所が両国に複数形成されていることを指摘する。ブラジル・サンパウロ市には日本と緊密につながる日系コミュニティが形成されており、さまざまな日系団体での活動が若者たちに「ブラジルの日系人」として肯定的にアイデンティファイする機会を提供しているという。来日した日系ブラジル人の子どもについては、公立学校内の日本語教室やブラジル人学校、文科省の「虹の架け橋事業」、自治体やNPO団体の活動が居場所となっていることが紹介される。特に興味深いのは帰国したブラジル人についての考察である。著者によれば日本からブラジルに帰国した学齢期の子どもたちを結びつける制度（例えば日本の「帰国生クラス」に該当するもの）は存在しない。そのため、かれらはFacebookのようなツールでつながり合い、日本のポップカルチャーについて日本語で語り合う居場所をインターネット空間に形成しているという。通信技術の発達によって、「地球の反対側にあるもう一つの場所を参照しながら」新たな居場所をつくるのが容易になっている。

こうした電子メディアの活用による若者たちの居場所づくりに焦点を合わせたのが、つづく村田・古川論文（自由投稿論文）である。著者らは日本の大学進学を目指す東アジア諸国出身の留学生にインタビューを行い、かれらが活用するSNS（Social Networking Service）について詳細に知るために通信記録の収集を行った。その結果、留学生たちがLineやFacebook、Skypeをはじめとする通信アプリケーションを利用しながら出身国に住む家族や学生時代の友人、日本に住む同郷の留学生仲間や所属する留学生別科の関係者とつながり、大学受験に際して多様な支援を受け取っていることが明らかにされている。著者ら、留学生たちがSNSを通じて受験に関わる情報や知識を遠隔地にいる他者と瞬時に交換・共有したり、かれらから共感や励ましのメッセージやイラストを受け取っていることに注目する。すなわち、留学生たちはSNSを活用することによって空間的距離や活動時間帯のズレといった障害を克服し、日本の大学受験にまつわる悩みや不安を解消できる相互支援空間をオンライン上に構築していると考察される。本論文からは、一時的な滞在者として社会の周縁部に排斥されがちな留学生たちが自己表現し、安心感を得られる居場所を考えるにあたって、対面的場面だけではなく、オン

ライン上の相互支援の可能性を検討することの重要性が示唆される。

徳永論文もまた、越境する若者たちが電子メディアを積極的に活用する様子を彼女たちの視点から鮮明に描き出している。著者はアメリカの高校で行われているNPOの学習支援プログラムにボランティアとして参加し、アジア系移民の女子生徒たちと関わり合うなかで彼女たちの日常を参与観察してインタビューを実施した。そのなかで、女子高校生たちがSNSやウェブサイト、Skypeなどを介してアジアのポピュラーカルチャーを受容・消費し、出身国でもアメリカでもない第三国に憧れや愛着を抱いてその地を「想像上のホーム」としていることに着目する。日本のアニメやドラマ、アイドルグループは特に人気で、関心を共にするアジア系の同年齢の若者たちがSNSなどで知り合い、「ヴァーチャルなアジア系コミュニティ」を形成しているという。こうしたオンライン上のコミュニティへの参加は、彼女たちの「移住に伴う喪失感や困難さ、ストレスを和らげ」ることに貢献しており、受け入れ社会で排除されがちな若者たちが「アジア人」として結束し、肯定的なアイデンティティを構築するための、重要な居場所になっていることが示唆される。注目したいのは、若者たちが自分の出身国だけではなくほかのアジア諸国の文化を自らの文化として消費し、アジア諸国の若者たちと情緒的につながり、アジア人としての誇りを形成している点である。若者たちの「居場所」が「目に見える物理的空間にだけ存在するのではなく、国境も越えし、想像の世界に飛ぶこともある」という指摘は前出の山ノ内論文や村田・古川論文とも重なる点であり、異文化間教育学において越境する子ども・若者の居場所づくりをどのように支援していくかという問題を考えるにあたって新しい視点を提出している。

最後のマーフィ重松論文は、日本人の母とアメリカ人の父の間に生まれた若者のライフストーリーを通じて、ミックスルーツをもつ若者たちの「ホーム」意識やアイデンティティを考察したものである。論文中に登場する「マサ」は映像作家であり、彼の代表作には二つ（以上）の文化的背景をもって育った若者たちのルーツやホーム感覚が描かれていることが紹介される。著者は「ハーフ」や「ダブル」と呼ばれる若者たちが常に「マジョリティから分離されているという感覚やマジョリティに溶け込むことはできないという感覚」をもち、安住できる「ホーム」を模索していることを論じる。バイリン

ガル・バイカルチュラルな能力を資源として活用する一方、ミックスであるがゆえに両親の祖国の両方で疎外感や違和感を抱かずにはいられない若者たちは、「ホーム」を探す過程で「日本人」「アメリカ人」といった既存のカテゴリーに疑問を投げかける。若者たちが一つの「ホーム」に固執せず、国や人種の境界を越えながらその場その場で「自分に関係するコミュニティとのつながりを見つけていく」という著者の考察は、人々が経験する「ホーム」の感覚と人種、国籍、言語の結びつきが固定的ではなく可変的であることを示唆するものである。それゆえに「ホーム」や「居場所」を模索する旅（＝ルート）は、既存の権力構造への抵抗力になりうる。若者たちのこうしたホーム／居場所探しを支えていくことが異文化間教育の課題の一つとして提起されるだろう。

## 5 おわりに—越境する若者たちの複数の「居場所」を捉える視点—

本稿では、『国や文化を越境する若者たちが形成する複数の「居場所』』をテーマに、異文化間教育学と居場所研究の交錯について検討してきた。冒頭で述べたとおり、マイノリティの子ども・若者たちの文化や自尊心が尊重される居場所づくりは異文化間教育学が長年取りくんできた課題であり、目新しいものではない。しかし、そこで提起される「居場所」は、受け入れ社会の「今ここ」にあるもの／つくるべきものとして措定されがちであった。それに対して本特集に収録された論稿は、トランスナショナリズムやディアスポラ、越境といった理論的視点を採用し、越境する若者たちの「居場所」が一つの国に限定されず複数の国にまたがって存在する可能性や、物理的な空間に限定されず想像の世界やヴァーチャルな空間に広がっている可能性について検討するものである。これら論稿の議論を踏まえ、最後に異文化間教育学における居場所研究の課題についてまとめてみたい。

伊豫谷 (2007: 5) はこれまでの移民研究において、「人は、自明のものとしてある場所に結びつけられ、場と境界を前提として、場という観点から移動をとらえてきた」と言及し、研究者が無意識的に措定してきた「場所の自明性」を批判する。この指摘は異文化間教育学において「居場所」概念を使用するうえでも重要である。越境する子ども／若者たちの視点に立ったとき、マジョリティにとって当たり前のように「居場所」となる空間がかれらに

とっては「居場所」となりえないことが多い。その背景には、マジョリティとは異なる立場や経験—不安定な法的立場、文化の齟齬、度重なる移動、受け入れ社会からの排除—といった構造上の問題が存在する。若者たちはそうした排斥や抑圧に対して新しい「居場所」を主体的に創造している。本特集の論稿が明らかにしたように、そうした場の創造に果たす電子メディアの役割は大きい。

伊豫谷は「移動から場をとらえる」ことを提言しているが、異文化間教育学においても若者たちがたどってきたルートを丁寧に追跡し、「居場所」や「ホーム」が国境を越えた地点に複数形成されていることやヴァーチャル空間に広がっていることに注目する必要があるだろう。こうした居場所が大事なのは、同じ経験を共有するマイノリティの若者たち同士を結びつけ、一つの人種や国籍といったカテゴリーに人々を押し込める権力構造に立ち向かう契機を与えてくれるからである。その過程で若者たちは人種や国民国家の境界をすり抜けるハイブリッドなアイデンティティや、一つの国に限定されない将来展望を描くことが可能になっている。異文化間教育学においては、越境する若者たちが創り出す居場所の複数性に目を向け、グローバルなまなごしや行動原理を培う若者たちの豊かな生き方を支えていくことが求められている。想像上のホームやオンラインの居場所、エスニック団体が中心となって組織する居場所など、周縁化・不可視化されやすい場と受け入れ社会の制度や組織、文化とをどのようにつなげていくかという課題に取り組むことが、今後期待される。

〈注〉

- 1) 例えば榎井(2013)はとよなか国際交流協会における子どもサポート事業を取り上げ、外国にルーツをもつ大学生がロールモデルとなって外国人の子どもたちのための居場所づくりを行っていることを紹介している。
- 2) KEYは英語名「KorEan Youth」からの略称。前身は1991年に設立された「在日韓国青年連合(韓青連)」で、2003年にKEYに名称を変更し、「在日コリアン青年が集い学び合う場」であることを一層明確化している(戴, 2009)。
- 3) ハンナーツ(Hannertz, 1990: 239)によれば、コスモポリタンな人間は「多様な文化的経験に対する知的・哲学的な開放性、統一性よりも差異への希求」をもち、「世界をホームとする(at home in the world)」感覚をもつ人間である。

(引用文献)

- 新谷周平 (2001) 『「居場所」型施設における若者の関わり方—公的中高生施設『ゆう杉並』のエスノグラフィー—』『生涯学習・社会教育学研究』26, 21-30.
- Basch, L. G., Glick Schiller, N., & Szanton Blanc, C. (1994) *Nations Unbound: Transnational Projects, Postcolonial Predicaments, and Deterritorialized Nation-States*, New York: Gordon and Breach.
- 榎井 縁 (2013) 「ニューカマーの子どもたちのいま—“地域の取り組み”から「見える」こと—」『異文化間教育学』37, 47-62.
- Hannertz, U. (1990) “Cosmopolitans and Locals in World Culture.” *Theory, Culture and Society*, Vol. 7, No. 2, 237-251.
- 伊豫谷登士郎 (2007) 「方法としての移民—移動から場をとらえる—」伊豫谷登士郎 (編) 『移動から場所を問う—現代移民研究の課題—』有信堂高文社, 3-23.
- Kibria, N. (2002) “Of Blood, Belonging, and Homeland Trips: Transnationalism and Identity among Second-Generation Chinese and Korean Americans.” In Levitt, P. & Waters, M. C. (eds.), *The Changing Face of Home: The Transnational Lives of the Second Generation*, New York: Russell Sage Foundation, 295-311.
- Levitt, P. & Waters, M. C. (2002) *The Changing Face of Home: The Transnational Lives of the Second Generation*, New York: Russell Sage Foundation.
- Levitt, P. (2009) “Roots and Routes: Understanding the Lives of the Second Generation Transnationally.” *Journal of Ethnic and Migration Studies*, Vol. 35, No. 7, 1225-1242.
- 真鍋真澄 (2007) 「ニューカマーの子どもにとっての『居がい』について—移り住んだ場所への文化的アイデンティティフィケーションに関する一考察—」『子ども社会研究』13, 32-48.
- 額賀美紗子 (2013) 『越境する日本人家族と教育—「グローバル型能力」育成の葛藤—』勁草書房.
- Olsen, L. (1997) *Made in America: Immigrant Students in Our Public Schools*, New York: The New Press.
- Portes, A., Guarnizo, L. E., & Landolt, P. (1999) “The Study of Transnationalism: Pitfalls and Promise of an Emergent Research Field.” *Ethnic and Racial Studies*, Vol. 22, No. 2, 217-237.
- 渋谷真樹 (2013) 「ルーツからルートへ—ニューカマーの子どもたちの今—」『異文化間教育学』37, 1-14.
- 清水睦美・すたんどばいみー (編) (2009) 『いちよう団地発! 外国人の子どもたちの挑戦』岩波書店.
- 清水睦美・家上幸子 (2009) 「「すたんどばいみー」の活動の軌跡—外国人の子どもたちによる「自治的運営組織」から「当事者団体」へ—」清水睦美・すたんどばいみー (編) (2009) 『いちよう団地発! 外国人の子どもたちの挑戦』岩波書店, 1-17.
- Suárez-Orozco, C., M. M. Suárez-Orozco, & Todorova, I. (2008) *Learning a New Land: Immigrant Students in American Society*, Cambridge, MA: Belknap Press of Harvard University Press.
- 住田正樹・南 博文 (編著) (2003) 『子どもたちの「居場所」と対人的世界の現在』九州大学出版会.
- 戴エイカ (2009) 「在日コリアン青年の学び合う場—ディアスポラ・スタディーズ—」大阪市立大学人権問題研究センター (編) 『批判的ディアスポラ論とマイノリティ』明石書



店, 137-184.

高橋朋子 (2009) 『中国帰国者三世四世の学校エスノグラフィー—母語教育から継承語教育へ—』生活書院.

田中治彦 (編著) (2001) 『子ども・若者の居場所の構想—「教育」から「関わり」の場へ—』学陽書房.

Wolf, D. L. (2002) "There's no Place like "Home": Emotional Transnationalism and the Struggles of Second-Generation Filipinos." In Levitt, P. & Waters, M. C. (eds.), *The Changing Face of Home: The Transnational Lives of the Second Generation*, New York: Russell Sage Foundation, 255-294.

矢野 泉 (2007) 「エスニック・マイノリティの子ども・若者の居場所をめぐる考察」『横浜国立大学教育人間科学部紀要I教育科学』9, 169-177.

Zhou, M. & Bankston III, C. L. (1998) *Growing Up American: How Vietnamese Children Adapt to American Life*, New York: Russell Sage.

(ぬかが みさこ 和光大学 現代人間学部 准教授 教育社会学)